

## ファンタジーの意味

### — E. M. フォースターの短編小説 —

向 井 千代子

#### (1)

E.M.フォースターとD.H.ロレンスは非常に似ていながら、対局に立つ作家である。ロレンス、フォースター共に「自然」を評価し、「機械文明」を嫌うという共通点がある。そして多くの点でロレンスがフォースターから影響を受けているのは確かである。だが「自然」に対する態度が少しばかり違う。ロレンスにとって自然は想像力の源泉、生命力の源であり、その対立物として都会や産業世界といったものがある。つまりロレンスにあっては単純な二項対立が成立する。その理由としてはロレンスの出身階級が労働者階級であり、何の罪の意識もなく資本家階級を非難できたことが考えられる。

フォースターも同じように自然の側に立つのであるが、対立はもう少し複雑である。というのは「自然」は人間の内と外の両方に存在するばかりでなく、対する「文明」や「社会」といったものも、人間の内と外に存在するからである。人間はなかなか素直に「自然」の側に身を投じることができない。しかも人間に対して「自然」は様々な姿を示す。「自然」は必ずしも人間に対して善意のみの存在ではない。一方ロレンスは作中人物を「自然」の側に立つ人物、「文明」の側に立つ人物、中間に立つ人物というふうに図式化して描く傾向がある。

この「自然」の複雑さ、それがフォースターの面白さであり、また、理解

のしにくさでもある。だが、この「自然」という言葉を「本能」という言葉に置き換えてみたとき、何故フォースターが我々の内なる自然、すなわち「本能」に対して微妙な態度を示すのかがわかってくるだろう。フォースターの死後、彼が同性愛者であったことが明らかにされた。ロレンスのように手放して我々の内なる「自然」の声に耳傾けよと説くことのできぬフォースターの中に、同性愛が罪であるとされていた時代の道徳の中であって悩みつつあるフォースターの姿を見て取ることもできるだろう。同性愛の問題を全面的に扱った『モーリス』(*Maurice*, 1971)は1914年に既に取り上げられていたが、発表されたのは彼の死後のことであった。<sup>4)</sup> 彼が小説家としての筆を折った原因として、この問題があったとはよく言われることである。しかしこんなふうにも考えられる。ある時期以後のフォースターは自分の中のホモ・セクシャルな傾向性を、当時の社会一般の道徳観に捉われることなく容認できるようになったのだろう。そして、そのとき既に小説を書く必要もなくなったのだろうという推測である。すなわち、時代や社会の道徳と、その中に生きる人間の関係を捉え切ったとき、いわゆる一般の道徳観というものは、個人の属する個々の社会を支えるものではあっても、他の民族、他の文明のそれと対比したとき、相対的なものでしかないこと、それよりももっと大事なことは人間がいかに自由に生きるか、いかに自然にふるまうかであることを小説の形を通じて表現し切ったとき、フォースターは小説を書く内的衝動と内的必然性を失ったのだという説明である。

ではフォースターが相対化しようとした価値観、道徳観とは何であったのか。それは、フォースターの生まれ育ったイギリスの中産階級の持つキリスト教的価値観、道徳観であった。彼の小説が階級問題を主に扱うのはそのせいである。このイギリスの中産階級のモラルは彼の小説においてイギリス内の他の階級のモラルとぶつかるばかりでなく、イタリアやインドの一般庶民の価値観とぶつかることによって、その弱点と限界を露呈する。それによってフォースターの小説はヘンリー・ジェームズの国際的小説にも似てくる。しかし根本的にはフォースターの問題意識の中心は階級意識である。自分の

内にある階級意識を見据える姿勢から出発したフォースターは、やがて、その階級意識を乗り越え、民族の違いを乗り越えての友情の可能性の問題を扱う『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) にまでたどり着いた。「国際性」とか「国際相互理解」などという言葉が飛びかう昨今だが、真の「国際性」にたどり着く以前に、自分の中の「差別意識」「エリート意識」といったものを検証してみる必要のあることをフォースターの小説は教えてくれる。

本論文では、フォースターの初期に書かれた短編を選び、その中で彼の生涯にわたる問題意識の根がどのような形で取り扱われているのかを見て行きたい。

## (2)

フォースターの最初の短編集『天国行き乗り合い馬車』(*The Celestial Omnibus and Other Stories*) が出版されたのは1911年のことで、それまでに『インドへの道』を除く彼の主要な小説は既に出版されていた。<sup>(2)</sup> しかしここに収録された作品のほとんどは彼の作家生活の初期に書かれたものである。彼の二番目の短編集『永遠の瞬間』(*The Eternal Moment*) は1928年に出版され、1947年にはこれら二つの短編集をまとめた『E. M. フォースター短編集』(*The Collected Short Stories of E. M. Forster*) が出ている。<sup>(3)</sup> 1947年の短編集に付けた序文のなかで、フォースターは自分の物語を「ファンタジー」の作品と呼んでいる。最初フォースターはファンタジーを女性名詞として受けているが、やがて「彼女または彼」と言い直し、次のように説明する。

というのは、ファンタジーは女性であることが多いが、時に男性にも似ており、かつて神々のちょっとした用事をやっていたヘルメス神——走り使いであり、機械の破壊者であり、魂をあまり恐ろしくない来世へと導く神——の役割さえ果たすからである。<sup>(4)</sup>

一般にファンタジーという場合「幻想」「空想」などと翻訳されるように、現実世界からかけ離れた空想の世界、夢の世界に心を遊ばせるための仕掛けであり、ファンタジーの代表的な作品であるL. キャロルの『不思議の国のアリス』に見られるように最後には夢から覚めてこの現実の世界に戻ってくる。フォースターの考えるファンタジーというのはこのいわゆる一般のファンタジーよりも少し幅の広いものであるようである。フォースターの考えるファンタジーの意味をはっきり掴むために彼の小説論『小説の諸相』(*Aspects of the Novel*, 1927) の第6章「ファンタジー」を見てみよう。フォースターは「ファンタジー」と「予言」を区別して次のように言う。

それら（＝ファンタジーと予言）は神々を持つという点では似ているが、持っている神々が違う。（中略）神の呼び出しがまたも必要になる。そこでファンタジーのためには空の低いところ、浅瀬、小山に住むすべての生き物、牧羊神や樹木の精、記憶違いや言葉の一致、パンの神や語呂合わせ（pun）、墓のこちら側にある中世風のものすべてを呼び出そう。<sup>(5)</sup>

ファンタジーの力は宇宙の隅々まで浸透している。しかし宇宙を支配する諸力には及ばない。天の中枢である星々、不変の法則の軍団は影響されない。このタイプの小説は即興の響きをもっていて、それがその力と魅力になっている。この種の小説には堅固な人物描写、行動や文明への鋭く厳しい批評といったものはあるかもしれないが、一条の光のようなものが残っていなければならない。特に召喚すべき一人の神がいるとしたら、ヘルメス神——メッセンジャーであり、盗賊であり、魂をあまり恐ろしげでない来世へと導く神——を呼び出そう。<sup>(6)</sup>

ここでもヘルメス神が出てくるが、ヘルメス神とはギリシア神話に出てくる神で、ゼウスとマイアの子であり、神々の使者を務め、商人や雄弁家や盗賊などの守護神とされる。道路を司り、使者の霊を黄泉の国に導き、竖琴の

発明者ともされる。翼のある帽子を被り、翼のある靴を履き、2匹の蛇を絡ませた杖を持つ美しい青年の姿で表わされる。そしてこの杖には何でも反対のものを調和する力があるという。ファンタジーの守護神としてフォースターが出してくるヘルメスが、魂を現世から来世へと導く神であるというところに注目したい。ファンタジーは予言の重さや厳しさを持たず、軽い調子で現実の世界に超自然界からの息吹きを吹きこむのである。

以上がフォースターの説明するファンタジーであるが、より一般的なファンタジーの見方もファンタジーの一側面であるのでここに紹介しておく。というのは、フォースターは語らないけれども、ファンタジーにこのような「逃避的」側面があることも事実であるからである。引用はウィルフレッド・ストーン<sup>1)</sup>の著書からのものである。

心理的現象としてのファンタジーは、夢や想像や希望的観測によって、現実には手に入らないものを手に入れる手段である。文学的現象としては、このようにして手に入れたもの——人前に出せるように少しばかり整えてはあるが——の記録である。ファンタジーは老人であれ、若者であれ、等しく（とは言っても特に若者が）分別のあるやり方で周囲の状況に対処できないときに、そこから逃れたり、それに耐えられるようにするための工夫なのだ。フロイドはこう書いている。「幸福な人は決してファンタジーに耽らない、不満のあるものだけが耽ると言えるだろう。ファンタジーの動機は不満足な願望である。そして一つ一つのファンタジーは願望の成就であり満足の行かない現実の修正である。」<sup>(7)</sup>

### (3) 「<sup>パニック</sup>恐怖の物語」 (“A Story of a Panic”)

この物語は1902年のイタリア旅行中ラヴェロでインスピレーションを受けて書き始められたフォースターの最初の短編である。作品は三つの部分からなる。

まず最初の部分ではラヴェロの小さなホテルに宿泊中のイギリス人旅行者

たちが、ある午後、近くの風光明媚な栃の木の林にピクニックに行ったとき、パンの神の出現によって文字通り恐怖（Panic）の体験をする。旅行者たちの一行は、語り手の私（タイトラー氏）と妻と娘、ロビンソン姉妹、姉妹の甥のユースタス、画家志望のリーランド、元牧師で今はユースタスの家庭教師のサンドバッチ氏である。語り手は最も典型的なイギリス紳士で、特に気取りやのリーランドと怠け者の少年ユースタスを嫌っている。ユースタスは14才の青白い痩せた運動嫌いの不健康そうな少年であり、遊びも勉強も好きでないはっきりしない少年である。彼らの訪れたバローネ・フォンターナ・カローソは美しい谷間であり、谷とは言ってもラヴェロの町を見下ろすほどの高さにあり、谷と呼ばれるのは周囲を高い山々に囲まれているからである。

その谷のはずれはカップ状の大きな窪地になっており、周りの切り立った山々の峡谷がそこに向かって放射状に集まっていた。盆地も峡谷も、峡谷を分けている山の背も、一面に葉のよく茂った栃の木に覆われているために、指のいくつもある緑の手が、<sup>てのひら</sup>掌を上に向けているような外観を呈していた。そしてその掌の中に我々を掴もうと激しく身もだえしていた。（10-11）

その丘の上で旅行者たちは食事をし、食後の会話のなかでパンの神の話が出る。この間ユースタスは木を切って笛を作っている。パンの神はギリシア神話の神で、ローマ神話のファウヌス（共に牧羊神と訳される）にあたる。マーキュリー（＝ヘルメス）と森の女神ドリュアードの間にできた森林・原・牧羊の神である。普通は壮年を過ぎた顔及び上体と山羊の下半身とを持つ男子として伝えられている。また「パン」はギリシア語で「すべて」「万物」を意味する。「パニック」（Panic）は「パンの」（of Pan）という意味で、人があわてふためくのはパンの神の為せるわざであると信じられたからであるという。パンの神は葦で作ったパンの笛を吹く。ここでパンの神がファンタジーの守護神とされたヘルメスの子であるというのも面白い。

パンの神の話題が出たのは、栃の木の林の中に空き地が二つあり、木が切られていることから、自然破壊の問題をリーランドが語り始めたためである。リーランドは言う。「我々は皆、どうしようもないほどに俗悪になってしまっている。自分は例外だなんて言いません。水の精が水を見捨て、山の精が山を見捨て、森はもはやパンの神に宿を与えないのは、我々のせいであり、我々の恥なのです。」(13)すると元牧師のサンドバッチが「パンの神は死んだ」という話をする。すなわち、キリストの誕生のとき、海岸近くを航行していた船乗りたちが「偉大な神パンは死んだ」と大きな声で三度言われるのを聞いたという物語を語る。その後会話があちこち動き、やがて異様に静かになる。「すべての物音が消えた。遠くの方で大きな栃の木の枝と枝が木の揺れるにつれてこすれ合う音がするばかり。」(13-14)やがて、その音も消えて、「自然の女神がくつろいでいるときにしばしば感じるような緊張感が忍びこんできた。」(13)と、その時、その静けさを破って、ユースタスの笛が響き渡る。その耳をつんざくような笛の音に引かれて何かがやってくる。

それから再び恐ろしい沈黙が我々に襲いかかった。いまや私は立ち上がって、向かい側の尾根の一つを走り降りてくる猫の忍び足のような静かな風が、走りながらうす緑の葉を濃緑色に変えてゆくのを見つめていた。(14)

全員、恐怖に駆られて山を駆け降りる。ここまでが第1章である。

第2章では、山を下った人々が恐怖も納まって気がつく、ユースタスがいない。恐る恐る元の場所に戻ると、少年は意識不明で横たわっている。やがて目を覚ましたユースタスは奇妙な笑いを浮かべる。どうもユースタスは他の人々のような恐怖の体験をしなかったらしい。語り手は近くの地面に山羊の足跡のようなものを認めるが、ユースタスはそれを見ると上に寝転んで、犬が泥のなかで転げ回るみたいに転げ回る。帰り道、ユースタスは今までの彼とはまったく変わってしまい、元気に林の中を駆け回り、花を摘んだり、

その花を見も知らぬイタリア人の老婆に捧げ頬にキスまでする。それだけでもびっくりしているところに、ホテルに帰ればいつものボーイの代わりに臨時雇いで来ている漁師のジェナロに急に親しみをを見せて、抱きついたりする。

夕食のとき、ユースタスに向かってジェナロが親しい人に呼びかける時のみ使う二人称単数形を使って話しかけているのを見て、語り手は腹を立て注意する。それに対してジェナロは「それはそうだが、そんなことは重要ではない」「もしユースタチオが敬語で呼んでくれと頼むのなら、そうしますよ」と答える。ここで挑戦を受けるのは典型的なイギリス紳士である語り手の階級意識である。「私はイタリア人には、たとえ彼らがそれに値しなくても、愛想よく振る舞うべきであると常々主張していた。だが、このふしだらなほどの親しみの習慣にはまったく我慢できなかった。誰にとっても無遠慮と屈辱としか思えなかったろう。」(22)「イタリア語で言う場合には英語では決して言えないことが言えてしまう。それに、この階級の人間に洗練された口の聞き方をしても役に立たない。」(23)という語り手の説明、ジェナロに対して「彼は若い英国紳士であり、君は貧しいイタリアの漁師なんだから」敬語を使えと命令するなど、すべて階級意識、イタリア人よりイギリス人の方が上位にあるという意識から来る発言である。

第3章は同じ日の真夜中の出来事である。語り手は真夜中に庭の方で物音がするので目を覚ます。正体はユースタスであった。彼が庭で走ったり歌ったりしているのであった。やがて彼は語りだしたが、その内容は自然の女神の偉大な力を讃える、詩的なものであった。語り手はリーランドと一緒にユースタスを捕まえようとするが捕まえられない。ジェナロにやらせようとするが「彼を連れ帰ると死ぬかも知れない」と言って断わる。しかし語り手は金の方でジェナロを誘惑する。浜るジェナロを金で釣ってユースタスを自分たちの隠れているところに誘い出させる。ユースタスは涙を流しながら「部屋に連れて行かないでくれ。狭すぎるよ」と懇願するが、部屋に閉じ込められる。語り手はキリストを売ったユダが得た銀貨30枚のことを考えながら、投げつけるようにして報酬の10リラをジェナロに渡す。ジェナロは友人を裏切っ



た自分の行動を悔い、このまま部屋に閉じ込めておいたら朝には死んでいるだろうと言う。彼の話によると、同じような事件が前にもあり、部屋に閉じ込められた人は死んでしまったらしい。自分にも同じ経験があるが、「自分には両親も親類も友人もいなくて、最初の晩に自由に森を駆け回ったり、岩によじ登ったり、水に飛びこんだりして欲望を満たすことができたために今こうして生きていられるのだ」(32)と説明する。リーランドが間違っテランプを倒した隙に、ジェナロはユースタスの部屋に行き、彼を救出する。二人は二階から飛び降り、ユースタスは塀を乗り越えて逃げ出すが、ジェナロは10リラを握りしめたまま倒れて死ぬ。

ジェナロは犠牲者である。一度は語り手によってユダに譬えられるとはいえ、改心してユースタスを救い出したというのに、何故ジェナロは死ぬのか、不可解である。金への欲望と、自分の内なる自然の声との間で二つに引き裂かれて、死の世界へ行ってしまったのかもしれない。パンの神の出現はあからさまには触れられていないが、ユースタスの変化はパンの神との出会いによって引き起こされたと考えてよい。パンの神の姿がしかと描写されていないのは、読者がそこにパンの神を想定してもしなくてもよいとの作者の配慮が働いているからである。それはただのそよ風に過ぎなかったのかも知れない。なんらかの気配に過ぎなかったのかも知れない。しかし、そこで少年は何物かに働きかけられ、少年の内なる何物かが目覚めたのだ。少年の内に靈感が溢れ、様々な自然の事物について語り出す。この少年は作者フォースターでもあろう。短編集の序文で、フォースターは自分は生涯で三度「土地の霊」(Genius Loci)との出会いを体験し、それによって物語を書いたと語っている。<sup>(8)</sup> その最初の経験が1905年5月のラヴェロの町から2、3マイル離れた、とある谷間でのことであった。だから、この物語はユースタスの解放の物語であるばかりでなく、フォースター自身の魂の確認と解放の物語でもある。

#### (4) 『別世界』(“ Other Kingdom ”)

タイトルの「別世界」(Other Kingdom)とはイギリスのハートフォード州にあるウォーターズ氏の屋敷に隣接するブナの林の名前である。しかしそれにあえて「別世界」「別天地」「別の王国」と訳せる名前を付けたのには何らかの意味があるのであろう。イギリスは‘the United Kingdom’と称するから、これはイギリスでない王国、例えば‘Kingdom of Heaven’(天国)とか、あるいはフォースターの好きな‘Kingdom of Nature’(自然界)を意味するのも知れない。

物語は4章から成る。第1章は語り手である家庭教師のインスキップがハーコート・ウォーターズ氏の婚約者のイーヴリン・ボーモント嬢と氏の保護を受けている青年ジャック・フォードにラテン語の古典を教えているところから始まる。「誰をあなたは避けようというのか、愚か者よ、神々もまた森に住まいたりしものを。」これがこの物語の中心主題である。昔から神々の住まいであった森を所有しようとする人間の行為の愚かしさ、いや、この「森」を「自然」と言い換えれば意味はより明確となろう。人間はもともと誰の所有物でもなかった自然を自分たちで勝手に分割し、その所有権を巡って争ってきた。自然破壊の極まった20世紀になって、やっと我々はその愚かしさに気づき始めた。しかし、かといって我々は未開の文明に戻るわけには行かない。

ボーモント嬢はハーコートがアイルランドで見初めて婚約者として連れてきた、学問も財産も、さしたる親類もない娘である。ハーコートは彼女に婚約祝いとして隣接の雑木林を買い与える。喜ぶイーヴリン。しかしハーコートに貸借期間は99年だと告げられ、ちょっとばかりがっかりした様子のイーヴリンへハーコートは畳みかける。「99年というのは實際上永遠と同じことではないかね。」(63) これを聞いてフォードは秘密のノートに書きつける。「永遠：実際上は99年」

第2章では「別世界」へのピクニックが描かれる。イーヴリンを先頭に立

てて一行はお茶道具持参でブナ林へ出かけていく。ブナ林の前には小川が流れ、橋は1マイル先にしかないで、川の中を歩いて渡らなければならない。この日のイーヴリンは緑色の服を纏い、さながらブナの精である。この林にいる間にハーコートはイーヴリンに古典の勉強をさせるのは贅沢だと言って止めさせることにする。次に、林に通じる小川に橋を掛け、邸から牧場を越えて林に向かうアスファルトの小道を付け、少年たちが入り込まないように林を柵で囲もうと提案する。イーヴリンはすべての案に反対するが、ハーコートには彼女の気持ちが理解できない。「牧場は私のものだ。そこにフェンスを掛ける権利はある——私の領地と君の領地との間にね。」「じゃー、私を囲いの外に出してね」とイーヴリンは頼む。「決して囲い込んではいけません。私は外にいてははいけないのだから、誰もが来られるところに。」

第3章では大変なことが起きる。ハーコートがフォードの秘密のノートを読んでしまったのだ。そこにはハーコートをからかう文句や落書きが書いてあったほかに、イーヴリンへの思慕の情を歌った詩が書きつけてあったのである。フォードのためにとりなしをしようとするイーヴリンの努力も甲斐なく、フォードは追い出されてしまう。

第4章では、既に小川には橋が渡され囲いは完成し、邸から「別世界」へ続くアスファルトの小道も出来上がっている。フォードが立ち去ってから風の強い夜が続き、イーヴリンは邸の外へ出て来ない。着ている服も今は茶色である。語り手は今はハーコートの秘書となっている。ある日「別世界」から吹き飛ばされてきた木の枝が邸の芝生にまでやってくる。それに引かれてポーモント嬢が久しぶりに林へ行こうと提案する。出発のとき彼女は茶の服から緑の服に着替えている。踊るようにして林に向かう彼女の姿は次のように描写される。

踊りながら彼女は我々の社会や生活から離れて、家々や囲いが倒れ、大地が太陽の下に未開のままに広がっていた何世紀も前へと戻って行った。その衣服は彼女を包む木の葉のようであり、その手足の力強さは大

枝のようであり、その喉は朝陽に挨拶の言葉を投げかけ、雨に光る、滑らかな上枝のようであった。その髪の毛の動きによって喉が隠されると、木の葉の動きで上枝が隠れたように見えた。(82)

美しいイーヴリンの姿に我を忘れてハーコートは追いかける。「イーヴリン、永遠の祝福！ 永遠に僕のもの！ 僕のもの！」しかし彼女は逃げて行く。彼女は唄う。「おゝ、フォード、フォード、ウォーターズの中で私はあなたを通して私の王国に行くのよ。<sup>9)</sup> おゝ、フォード、私が女であったときの私の恋人。あなたのことは決して忘れない、私に太陽を遮って陰を与える枝があるかぎり、決して。」唄いながら彼女は小川を渡る。

こうして神話にあるアポロ神とダフネさながら<sup>10)</sup>ハーコートはイーヴリンを追って林に入る。しかし彼女の姿はどこかへ消えてしまった。風が再び強くなり、嵐になる。イーヴリンは帰ってこない。イーヴリンがフォードと駆け落ちしたと考えたハーコートはフォードの下宿を訪ねるが、彼は汚い部屋で古典を読んでいるところだった。話を聞いて彼は答える。「彼女は実際上あなたから逃れたのではなく、絶対的にあなたから逃れたのです。永遠に、永遠に、太陽の光を遮って陰を提供する枝のある限り。」(85)

この話はダフネの神話を踏まえている。水の精ダフネと同じようにイーヴリンは森の木に姿を変えてしまったのである。それはありえないとする読者にはそう考えることもできる余地を残してはあるが、あくまでも表面上は木に変わったと思わせる。ここにはフォースターの小説によくあるパターンが出てくる。自然と一体と思われる娘。その娘に恋する青年。娘を金の力で所有しようとする男。無力な観察者。アイルランドから連れて来られたイーヴリンは始めは素直にハーコートを愛していたのだろう。しかし徐々に彼の正体を知るにつれて、愛が冷め、実はフォードの方を愛していたことに気づいたのかも知れない。

だが、これは解放の物語というよりは、批判、風刺の物語である。イーヴリンには木に変わる以外に逃げ道がない。ファンタジーの助けがなかったら

彼女は死の世界へ逃げこむことになっただろう。イーヴリンをここまで追い詰めたのはハーコート の鈍さ、所有欲、自己満足である。ハーコートこそフォースターの最も嫌う典型的なイギリスの中産階級人、『眺めのある部屋』のセシル・ヴァイスや『ハワーズ・エンド』のウィルコックス氏に通じる人物である。

## (5) ファンタジーから長編小説へ

ところでフォースターの長編小説には、短編小説におけるようなあからさまなファンタジーの手法は使われていない。これはどういうことであろうか。ここでヘルメス神が死者を黄泉の国へと導く神であったことを思いだそう。思えば、イーヴリンの逃げこんだ「別世界」も死者の国であったのかも知れない。フォースターの小説では登場人物が突然死ぬことがよくある。『眺めのある部屋』のシニョーリア広場のイタリア人、『天使も踏むを恐れる処』のリリアと赤ん坊、『いと長き旅路』のリッキー、『ハワーズ・エンド』のルース・ウィルコックスとレナード・バスト、『インドへの道』のムーア夫人など。これらのショッキングな死がファンタジーの役割をしている。ファンタジーとは日常性を破る事件であり、超自然の侵入によって物事の本質がよりはっきりと浮かび上がるような仕掛けである。そのほかにも美しい景色や音楽、迫力のある景観——例えば『インドへの道』のマラバー洞窟——がファンタジーの役割を担っている。しかもフォースターのファンタジーの仕掛けの特徴はそれが美しい夢の世界へと我々をいざなう解放と逃避の仕掛けではなくて、むしろ自分の醜い姿を鏡に映して見せられるような悪夢じみたものなのである。「別世界」のように軽快な、遊び半分の気持で書かれたと思われるようなファンタジーでも、やはり、現実批判の色の濃い、パシミズムを中心に秘めたものなのである。苦いファンタジーと言おうか。

それが苦いのは何故か。それは多分フォースターの中に、無垢な少年と、世間知にまみれた大人の部分との両方がある、ロレンスのようには単純に自己を正当化できなかったからであろう。

## NOTES

- (1) 一応1914年に仕上げられ、その後時々手を加えて、最終稿の形となったのは1960年のことであると言う。  
cf. Claude J. Summers, *E. M. Forster* (New York : Frederick Ungar Publishing Co.,1983), p.141.
- (2) 『天使も踏むを恐れる処』 (*Where Angels Fear to Tread*, 1905), 『いと長き旅路』 (*The Longest Journey*, 1907) 『眺めのある部屋』 (*A Room with a View*, 1908) 『ハウーズ・エンド』 (*Howards End*, 1910).
- (3) 他に『来世、他』 (*The Life to Come and Other Stories*, 1972) が死後出版されている。
- (4) *Collected Short Stories* (Penguin Books, 1947), p.5. なお本論文のテキストとしてはこの版を使用した。以下の短編からの引用文のあとのかっこ内の数字はこの版のページ数である。
- (5) *Aspects of the Novel* (Penguin Books, 1990) ,p.104. First published by Edward Arnold in 1927.
- (6) Ibid.,p.105.
- (7) Wilfred Stone, *The Cave and the Mountain : A Study of E.M.Forster* (Stanford, Calif. : Stanford Univ. Press, 1967) ,p.124.
- (8) cf. *Collected Short Stories*, Introduction, pp.5-7.
- (9) ここは言葉遊びで‘Worters’と‘water’ (水) 、‘Ford’ と ‘ford’ (浅瀬を歩いて渡る) の懸詞である。
- (10) アポロはエロスの矢のいたずらによりダフネを慕うが、ダフネは反対にエロスの矢によってアポロを忌み嫌う。アポロに追いつかれそうになったダフネは川の神に助けを求め、月桂樹に変身した。